

まえがき

アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象

——映像資料の文化資源化——

研究代表者 高城 玲

本共同研究が対象とする映像資料「アチックフィルム・写真」とは、渋谷敬三を中心とするアチックミュージアム同人が、主に昭和初期、1930年代を中心とする調査旅行などの際に撮影した動画フィルムと写真を指す。神奈川大学日本常民文化研究所には、動画フィルムが47巻、写真が9,000点弱所蔵されており、それらは昭和初期にかけての日本各地の景観とそこに住まう人々の生活、民俗、芸能や当時使用されていた民具などのモノを具体的な映像として記録にとどめている非常に貴重なものである。

今回、国際常民文化研究機構が新たに発足したことを受け、本共同研究班では、この映像資料を主な研究対象とする「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」と題する共同研究を推進してきた。共同研究者は、飯田卓（国立民族学博物館／視覚メディアの人類学）、井上潤（渋谷史料館／日本村落史）、小島摩文（鹿児島純心女子大学／民俗学、民具学）、清水郁郎（芝浦工業大学／建築学、文化人類学）、高城玲（神奈川大学／文化人類学）、羽毛田智幸（横浜市歴史博物館／民俗学・博物館学）、原田健一（新潟大学／映像社会学）の7名であり、国際常民文化研究機構の小林光一郎（民俗学）も研究に加わった。

本共同研究は主に2つの課題を念頭に置いている。第1は、国際常民文化研究機構全体における所蔵資料の情報共有化事業と連携し、映像資料の文化資源化の可能性を探るという課題であり、第2は研究目的として主に（1）モノという物質文化の問題、（2）モノと人との関係性の問題、（3）異文化（自文化）表象の問題等を検討するという課題である。

本書（資料編）は、上記の第1の課題に対する共同研究の成果である。第2の課題である「モノ・身体・表象」に関連する研究に着手するにあたって、まずは前段階として映像資料の整理とその文化資源化のための作業が欠かせない。アチックフィルム・写真は、その資料的価値が認められながらも、膨大な数にのぼる戦前の資料であることもあって、いまだ資料整理の途上にあり、いくつかの例外を除いて研究として正面から取りあげられてこなかった。そのため本共同研究では、まずは映像資料の整理とその文化資源化に重点を置くこととなったのである。上記第2の課題に関しては、本書（資料編）での成果を受けて、2014年度には『国際常民文化研究叢書』8の分冊として個別の研究成果である「論文編」を刊行する予定である。

ここでは、本書（資料編）の構成と特徴について簡単に説明しておきたい。本書で資料として取りあげる映像資料は、渋谷敬三をはじめとするアチックミュージアム同人らの調査団が1934（昭和9）年5月14日に鹿児島を出発してから5月20日に鹿児島に戻るまでの7日間にわたる「薩南十島調査」（現在の鹿児島県十島村）で撮影されたものである。当時は前年に「としま丸」という



写真1 口之島小中学校での現地上映会
(2010年3月23日) 撮影：羽毛田智幸



写真2 中之島の役場支所での現地上映会
(2011年3月19日) 撮影：因琢哉

船が竣成就航し、その船を調査団が借り上げて各島を訪問している。船中泊を重ねながら、短期間に各島をめぐるという駆け足の調査ではあったが、民俗学・民族学、宗教学、地理学、農学、生物学、人類学、岩石学などの各専門家を含み総勢20名以上の大規模な合同調査であった。戦後、渋沢が呼びかけて組織された九学会連合共同調査の礎となったのが「薩南十島」調査であるとも指摘される。本共同研究成果の資料編として、数あるアチックフィルム・写真の中でまず「薩南十島調査」を選択したのは、上記のように重要な共同調査であること、また、資料が比較的まとまっており、特にフィルムが編集されて字幕解説もついていたことなどの理由による。

本書（資料編）には、1. アチック写真本目録2013年度増補版（昭和9年薩南十島調査関連）、2. 国立民族学博物館の標本資料との照合、3. 『渋沢フィルム15十嶋』DVDタイム表、4. 地図、という主に4つの資料が収録されている。

各資料の説明に関しては、冒頭に掲げる小林光一郎による「アチック写真資料目録一本目録について」やそれぞれの凡例を参照いただきたいが、ここでは、本書（資料編）全体における特徴をまとめておきたい。まず、アチックフィルム・写真という映像資料そのものの資料整理に加えて、現地（鹿児島県十島村口之島、中之島）での上映会を開催し、そこで得られた映像資料に関する情報を新たに付け加えたことが大きな特徴として挙げられる。具体的には、2010年3月の口之島および十島村役場での上映会（写真1）、2011年3月の中之島での上映会（写真2）、2012年3月の口之島、中之島での調査という計3回の上映会、調査を現地で行った。特に口之島小中学校と十島村役場中之島支所で開催された現地上映会では、それぞれ約50名と70名という多くの島民の方々が戦前の映像に多大な関心を寄せて参集し、当時の映像に関する貴重な情報の提供を受けた。本書（資料編）は、こうして現地で得られた情報の項目を新たに付け加えながら編集されたものである。

また、本書では、国立民族学博物館に所蔵されている民具などの標本資料との照合関係も、点数的には少ないが合わせて資料として掲載した。1934（昭和9）年の「薩南十島調査」時に収集された民具などが現在では国立民族学博物館に収蔵されているが、それらがアチックフィルム・写真の映像資料にはどのように記録されているのか照合調査を行い新たな資料として収録している。

このように、本書（資料編）は、まず「薩南十島調査」時のアチックフィルム・写真資料を対象を限定した上で、映像資料を核にした多岐にわたる情報を統合的に整理するという文化資源化の可能性を検討していることに特徴があると言えるだろう。多岐にわたる情報とは、（1）動画フィルムと写真の映像資料を出発点として、（2）映像に関する目録、（3）現在残されている収集品、（4）上映会で現地の住民から新たに提供してもらった情報などを含み、それらを統合化して整理

しようとしたのである。こうした資料はより「厚い記述」のデータとして、今後の研究を支える柱となることが期待される。

今回は、「薩南十島調査」時の映像資料整理に対象を限定したが、こうした映像資料整理の方法が他のアチックフィルム・写真の文化資源化へのひとつの範例となっていけば、本共同研究の目的の一端は達成できたと言えるだろう。

なお、本書（資料編）に収録されている資料は7名の共同研究者および3名の業務協力者が共同で現地上映会と調査を行い、文化資源化へ向けた成果としてまとめたものであることを最後に付け加えておきたい。

共同研究者・研究協力者一覧

共同研究職分	氏 名	所属機関	専 門	所属期間
4. 映像資料の文化資源化				
4-1 アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象				
代表者	高 城 玲	神奈川大学	文化人類学・東南アジア研究	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
共同研究者	飯 田 卓	国立民族学博物館	視覚メディアの人類学	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
共同研究者	井 上 潤	渋沢史料館	日本村落史	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
共同研究者	小島 摩文	鹿児島純心女子大学	民俗学・民具学	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
共同研究者	清水 郁郎	芝浦工業大学	建築学・文化人類学	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
共同研究者	羽毛田智幸	横浜市歴史博物館	民俗学・博物館学	2012. 5. 1 ~ 2014. 3. 31
共同研究者	原田 健一	新潟大学	映像社会学	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31

共同研究職分	氏 名	年 月 日
業務協力者	因 琢 哉	2009. 9. 16 ~ 2014. 3. 31
業務協力者	岡田 翔平	2009. 9. 14 ~ 2014. 3. 31
業務協力者	小林光一郎	2009. 8. 1 ~ 2014. 3. 31

※所属機関は2013年4月1日時点